

ゼリ家貧クシテ食無し而レバ子共養フニ便無し而ルニ此ノ女日々ニ沐浴シ身ヲ淨メ綴ラ著
テ常ニ野ニ行テ菜ヲ採テ業トス又家ニ居タル時ハ家ヲ淨ムルヲ以テ役トス又菜ヲバ調ヘ盛
テ咲ヲ含テ人ニ此ヲ令食ム此ヲ以テ常ノ事トゾ有ケル間ニ其女遂ニ心直ナル故ニ神仙是ヲ
哀テ神仙ニ仕フ遂ニ自然ラ其ノ感應有テ春ノ野ニ出テ菜ヲ採テ食スル程ニ自ラ仙草ヲ食シ
テ天ヲ飛ブ事ヲ得タリ略○下

〔發心集五〕貧男差圖をこのむ事

ちかき世の事にや、としはたかくて、まづしくわりなきおとこありけり、つかさなどありける者
なりけれど、出つかふるたづきもなし、さすがにふるめかしき心にて、あやしきふるまひなどは
思ひよらず、世執なきにもあらねば、又かしらおろさんと思ふ心もなかりけり、つねには、どこ
ろもなく、ふる堂のやぶれたるにぞやどりたりける、つくくとし月ををくるあひだに、朝
夕するわざとては、人にかみほんぐなどこひあつめ、いくらもさしづをかきて、家つくるべきあ
らましをす寢殿は、しかく、門はなにかとなど、これを思ひはからひつ、つきせぬあらましに
こゝろをなぐさめて過ければ、見きく人はいみじき事のためしになんいひける、まことにある
まじきことをたくみたるは、はかなけれど、よく思へば、此世のたのしみには、こゝろをなぐ
さむるにしかず、一二町をつくりみてたる家とても、これをいひ思ひならはせる人めこそあれ、
まことにはわが身のおきふすところは、一二間にすぎず、その外はみなしたしきうとき人のあ
ざころのため、もしは野山にすむべきうし馬のれうをさへつくりをくにはあらずや、かくよし
なきことに、身をわづらはし、こゝろをくるしめて、百千年あらんために、材木をえらび、ひはだか
はらを、玉か、みとみがきたて、何のせんかはある、主のいのちあだなれば、すむ事久しからず、
あるひは他人のすみかとなり、あるひは風にやぶれ、雨にくちぬ、いはむや一度火事出きぬる時、